

スクールカウンセリングにおける不登校への取り組み

—援助過程における「父親」「母親」役割の試み—

坂 田 真 穂

(和歌山大学教育学部)

廣 井 亮 一

(児童学科助教授)

要約：本研究では、クラブ活動での挫折を契機に不登校に陥った女子高校生のスクールカウンセリング事例を通じて、スクールカウンセラーによる「父親」「母親」としての援助の利点と課題を検討した。家族関係の模索という課題をもつクライアントが、実際の父母による十分な関わりが望めない場合、カウンセラーが「父親」「母親」としての役割を担うことが、思春期の自立への援助に有効であることが明らかになった。しかし、カウンセラーが「父親」としてクライアントを社会に押し出す場合、押し出される先に「居場所」を確保しておくことが不可欠であり、そのための連携が重要であると思われた。また、連携において、スクールカウンセラーは、不登校生徒と教師、教育と医療をつなぐ役割を担うとともに、集団の力動に惑わされない安定した視点で、不登校生徒や教師などに支持的に関わるということが重要であると思われた。

キーワード：不登校、「父親」、「母親」、「居場所」、連携

I はじめに

思春期は、同一性の獲得など、発達の危機状態にあるといわれている。また、家庭から社会へその足場を移していくこの時期の子どもにとって、学校での友人や教師との関係は大切であるが、同時に、社会で挫折したときの癒しの場として家庭のもつ役割は非常に重要になってくる。佐藤（2005）は、絶対的な安らぎの場所としての家庭を子宮に例え、不登校には子宮回帰という意味合いがあると述べている。この時期の子どもについて考える際、その背後にある家庭の特徴を視野に入れずに理解することは難しい。河合（1980）が、「思春期に何らかの問題を起こすのは、母親の生き方を改変しようとする無意識的な力がそこにはたらいていることを示している」と述べているが、実際、児童期や思春期の子どもの問題の背後に、家族関係における問題が潜んでいることは少なくない。また、河合は、母性原理は「包含する」こと、父性原理は「切断する」ことにその特性をもっている

と述べ、その役割を担うものは必ずしも実母・実父でなくとも良いとしているが、本研究においても「父親」「母親」は父性原理・母性原理に基づいた心理的役割を担う者を指すこととする。菅（2006）は、発達課題としての「親離れ—自立」に向かうために、子どもはもう一度、親の懷のぬくもりを体験することが不可欠だと述べているが、そのような意味においても思春期には「父親」「母親」の存在が再び問われることとなるであろう。

本研究は、家庭における「父親」「母親」の心理的不在の中、両親によって抱えられることが叶わなかった不登校女子高校生に対するスクールカウンセリングの事例を検討したものである。教室にも家庭にも「居場所」を見出せず、保健室と他人の家庭をさまよう不登校生徒に対し、スクールカウンセラーが、時に、時間と場所の固定というカウンセリングの枠組みを超えながら「母親」としてクライアントを抱え、また時には、強い「父親」として自立を支えよう

と試みた。本研究では、家族の理解と協力が得られない不登校女子高校生の事例を通して、スクールカウンセラーによる「母親」としての抱えや「父親」としての支えを行った経過の報告を行う。

また、近年は不登校生徒のタイプも多様化しており、従来のような葛藤の強い事例ばかりではなく葛藤の少ない不登校が増えている（田嶋，2001）。学校には行けませんが、友人と遊んだり、アルバイトには行けるといった不登校生徒も少なくなく、身なりや髪の手入れに気を配る学生も多い。本研究の不登校生徒も、派手なファッションを好み、反抗的な態度を示す生徒であったため、怠学を疑う教師も多く、また対応に戸惑う者もいた。そのため、本事例では、担任教師やクラブ顧問、養護教諭、教科担当教師、管理職といったさまざまな立場の教師や主治医との連携を図りながら本生徒への周囲の理解を求めたり、保健室登校や単位認定制度の確立に取り組むなど、本生徒が、ありのままの自分で受け入れられるような場所としての「居場所」を学校の中に作る必要があった。スクールカウンセラーが不登校学生を、「母親」として抱えたり「父親」として押し出したりしながら教室に戻す取り組みを行う一方で、戻る先である学校に彼女の「居場所」を整えておくことが非常に重要だと考えたためである。また、教室に戻ってから、そのまま登校が定着するためにも、学校の中に彼女が「居場所」を見出すことが出来ることが重要であると思われた。従って、本研究では、周囲からは怠学を疑われやすい不登校生徒への理解を求める取り組みを通して、学校や地域医療との連携の在り方について考察することを第二の目的とする。

Ⅱ. 事例の概要

1. クライエントの臨床像

Y子（初来談時17歳、公立高校普通科2年、女子）。長い髪を流行の髪形にし、制服のスカートを短くしたその風貌は、今どきの女子高校生そのもので、筆者（坂田）が想像していた「不登校生徒」のイメージとは異なっていた。Y子

は、教師や両親に対してわがままで攻撃的な態度を取るため、周囲はY子を「不登校というよりは怠学ではないか」という視点で見ている。

2. 主訴

教室に入れない、家に居られない。

3. 家族

母方祖父母（ともに60代）、父・母（ともに40代）、兄（19歳）、本人（17歳）

兄は、X年4月より他県で一人暮らしをしながら専門学校に通っている。父親は婿養子で、祖父母、父、母で専業農家を営んでいる。

4. 生活歴および問題歴

Y子は、家族で専業農家を営む家の第二子として生まれた。母親によると「子どもの頃から手がかからず、しっかりしている子どもだった」とのこと。

Y子は、中学のときに、クラブ活動の上下関係が原因で胃潰瘍になり、クラブを辞めて母親にひどく叱られたことがある。高校入学後は、アルバイトをして専門学校へ進学するための資金を貯めながら、学校では所属クラブの部長を務めるなど、比較的充実した高校生活を送っていた。しかし、Y子が高2の夏休み明けにクラブ活動でのつまずきがきっかけで登校できなくなった。

登校できなくなる前、Y子は音楽部の部長として、まとまりのない部員を統率出来ずに悩んでいた。そんな中、クラブのことで遅くなったところを父親から「そんなに遅くなるなら辞めろ」と怒鳴られた。それをきっかけに、Y子は翌日から学校を欠席して自室に閉じこもるようになった。

Y子は2週間の欠席の後登校するようになったが、教室の騒がしさやまとまりの無さ、それを制しようとして怒鳴る教師の声が頭に響くように感じられ、教室に入れなくなった。家にいると母親が学校に行けと言って怒るため、家にも居られなくなった。教室へ入れない、家に居られない、「居場所」をなくしたY子は、朝から夕方までを学校の保健室で過ごすようになった。

この頃、Y子は、よく眠れない日が続いてい

た。食事量も減少し、胃痛を訴えたり、食後に嘔吐することも見られた。

Y子の担任は、40代の穏やかな男性教諭であり、Y子はクラスのまとまりの無さをこの担任教師の統率力の無さだと非難することもしばしばあった。そのため、この担任教師には反抗的な態度で接することが多く、担任も気難しいY子をもてあましてるように見えた。

5. 問題の見立てと支援目標

クラブ内での対人関係のもつれと、部長としての自己効力感の喪失を契機にした不安神経症的傾向。家族関係を模索するという課題が基底にあると思われた。初めは、Y子の自立を支えるような家族関係の確立を試みたが、両親が未熟であり協力が得難かったため、スクールカウンセラーが「父親」「母親」としてY子の自立を支えることとした。

Ⅲ. 面接の経過（X年9月～X+1年4月）

事例の記述において、#00はY子本人との面接、#P0はY子の親との面接を指すこととする。また、スクールカウンセラー（以下SC）の発言内容を〈 〉、Y子および家族の発言内容を「 」、その他の発言内容を『 』で表すこととする。

第1期：「母親」としての抱え（#1～#8：X年9月～11月）

#1：Y子の様子を見かねた担任と養護教諭からの紹介でY子との、一回45分のカウンセリングが始まった。「教室はごみが散らかっていて汚い。皆、授業中も好き勝手にしているし、先生と生徒の関係が良くない。そんなクラスがすごく嫌だ」と話す。また、「授業中にみんなが話す声や、先生が出す大きな声が頭に響いて怖い」「母親が怖い。近くを通るだけでびくびくしてしまう」と涙をこぼしながら訴えた。Y子の不安と恐怖に怯えた様子が伝わり、それと同時に、周囲が認識している反抗的なY子とは別の顔がY子にはあるのだとSCは感じた。父親を毛嫌いする年齢であるY子と、年頃の娘を持たない担任教師を見ながら、担任教師が反抗的で繊細なY子の態度に困惑している様子が伺わ

れた。

#2：「文化祭の出し物のために、クラスの子に自分のラジカセを貸したが、このまえ教室に行ったら、私のラジカセが埃を被って放り出されていた」と話し、無責任なクラスメイトや、それを注意しない担任教師に対する怒りをあらわにした。SCは、不登校のきっかけとなったまとまりのないクラブ員やそれを統率できない部長としての自分を、無責任なクラスメイトや、それを統率し切れない担任教師に投影しているように感じた。

#3：Y子は、週に一回のSCの来校日を心待ちにするようになっていた。

担任は『保護者と連絡を取りたいが、連絡しないでくれとY子が言う』と、Y子への対応に困惑していた。担任が家に連絡を入れると、母親がY子に怒るため、Y子は担任が家に連絡を入れることを“告げ口”のように感じていたのである。そのため、SCは〈Y子が出来ていることも同時に母親に伝えてみてはどうでしょうか〉と提案した。Y子が教室に戻るためには、担任を中心にしてその「居場所」作りをしてもらわねばならず、その準備段階として、まずは担任のY子に対する理解を深め、Y子との信頼関係を構築していく必要があった。

#4：この頃、Y子は通院を望むようになり、地域の内科クリニックにて抗うつ薬の処方を受けていた。また、服薬が必要な自分の状態について、Y子は、SCから母親に伝えてほしいと言ってきた。Y子の両親はY子の辛い気持ちに対して十分な共感的理解を示しておらず、医師の診断やSCの働きかけによってY子は両親の関心を集めようとしているのではないかとSCは思った。また、「入院したら、夜中に怖くなくても看護婦さんが寝るまで傍に居てくれると聞いた」と、Y子は入院を希望した。SCは家庭で十分に甘えることが出来ていないY子の寂しさを感じた。

#5：Y子は、これまで付き合っていた恋人と別れた。「今は私もしんどいから。また元気になったら付き合う」と言うY子。別れの現実感が伴っていないような違和感をSCは感じた。

Y子の内面は、まだ異性との付き合いほどには成熟していないのかもしれない。

P 1：担任に促されて、Y子の両親が不承不承といった面持ちでSCに会いに来た。担任は授業のため同席しなかった。ほとんど発言のない父親に比べ、母親は『何であんなことになったんですか！ 私はあの子に教室に行って欲しいんです！』と繰り返す。また、Y子が、地域で最も大きなK病院の精神科に行きたいと話していることを伝え、母親はSCに同行を依頼してきた。SCは本来病院には同行しないと話したが、『私達は忙しくて。私達は医者言うことが分からないし』と言う。担任教師に呼ばれて学校に来たものの、家業の忙しさを口実にY子に関わることを避けようとしているように思われた。# 4で医師の診断をSCの口から親に伝えて欲しいと依頼するY子、Y子の通院に同伴するようSCに依頼する両親、両親やY子との面談をSCに依頼して自分は同席しない担任教師、Y子とY子の周辺人物におけるコミュニケーションの回避をSCは感じ、今後、少しずつそれぞれの関係をつなげていくことが必要であると思った。この頃のY子は、全く教室に入られず、保健室でも毛布にくるまってぼんやりしていることが多かった。

6：結局、学校からの依頼もあり、SCがK病院に同行することとなった。学校との信頼関係が充分でない赴任1年目のSCにとって、時間や場所を固定させて行わなくてはならないというカウンセリングの枠組みの厳守を理由に病院への付き添いを断ることができなかった事情もあるが、悩みながらも結局通院に付き添うことにしたのは、病院に付き添ってくれる人も居ないY子をSCが「母親」として抱えようと思ったためである。学外の医療機関への付き添いはSCの行動化ではないかと思ったが、両親がY子を抱える力がないことを# P 1で感じ、Y子がこの苦境を乗り越えていくには「母親」の抱えが必要だと感じた。

SCは、Y子との関わりの中で、Y子の中にある葛藤や課題を感じていたため、Y子の許可のもと主治医であるO医師に〈医師による投薬

中心の治療と平行して、SCによる面接を継続していきたい〉と連携を申し出た。

P # 2：勤務日にはなかったこの日、Y子の母親から、突然SCの携帯電話に連絡が入った。後から聞いたところによると、学校が母親からの問い合わせに応じたいらしい。聞くと、Y子が今朝父親に「友達のところへ泊まる」と言って大きな荷物を持って学校へ向かったとのこと。『あの子、家へ帰りたくないみたいだし、家出かも。どうしたらいいんですか！』と非常に動揺している。SCは、Y子の母親が父親にではなく面識の薄いSCを頼って連絡してきたことに不自然さを感じた。この夫婦の関係は、実際には見た目よりずっと脆弱なのかもしれない。

Y子、親、担任、養護教諭、医師という、Y子を取巻く全ての対象が、週に1回しか来校しないSCを中心になんとかつながっている感じであった。SC抜きではY子を支えるシステムとして機能しない学校と家庭を、如何にして機能させていくかがSCの大きな課題であった。# 7：Y子は、2日前の家出騒動について、今の自分の辛さを両親に伝えようとしたが耳を傾けてくれなかったためだと語った。

また、数日前から他クラスの友人であるB子が保健室に入り浸っており、Y子同様、保健室で終日過ごすことが続いていた。学校では、『二人して怠けているのではないか』という見方をする教師も現れ、B子の担任教師や養護教諭にも動揺が起り始めた。

また、Y子のクラブ顧問である若い女性教師やO医師は、Y子の話を聞くうち、Y子の両親に対して非難めいた気持ちを持ち始めていた。Y子の周囲の人間が次々に巻き込まれていく様子、そして周囲が騒げば騒ぐほど行動化が派手になっていくY子を見て、まずはY子の周囲の動揺を鎮めなくてはならないとSCは思った。そのため、クラブ顧問や養護教諭のY子の両親に対する非難に傾聴して怒りを発散させるとともに、B子の担任と関わりながら、B子を早期に教室へ戻らせるための援助を行った。

P 3：母親が一人で来談。『Y子は教室に行けないような子じゃないんです』と興奮した様

子で訴え、『家業が忙しいのでY子を入院させることにした』と言った。Y子の行動は、Y子が高校受験時に進学したがっていた高校に進学させなかった自分たちへの当てつけだと、母は興奮した様子で机を叩いて泣いた。

これまで母親と話すことを怖がって避けていたY子が初めて「今日は先生（SC）を挟んでお母さんと3人で話してみようかな」と言っていた矢先だったが、そのことを伝えても母親はすねた子どものように泣くばかりでそれには応じなかった。

#8：Y子の帰宅拒否は激しくなっており、B子の家に泊まることが多くなっていた。「学校へ行け」という両親との間でトラブルがあり、初めて過呼吸発作を起こしたようである。「お母さんは分かってくれない。お父さんもお母さんの言いなりだ」と両親への不信感を募らせていた。自分を責める両親が怖くて仕方が無いY子は、この週から叔母（母親の妹）宅に身を寄せていた。Y子の激しい帰宅拒否に伴って、両親の気持ちも非常に揺れているように思えた。また、あんなに入院したいと言ったY子だったが、両親が入院に賛成するや否や、入院を拒み始めた。自らの多忙を理由にY子を入院させようとする両親に対し、O医師も強い憤慨を感じていたが、Y子を守るために周囲の動揺を抑えたかったSCは、O医師にもじっくり腰を据えて関わってもらうように依頼した。

第二期：連携と「居場所」作り（#9～#15： X年12月～X+1年2月）

#9：Y子の不思議な夢が語られた。

【夢】家族で地震対策のテレビを見ている。おじいちゃんが仏壇に手を合わせ『Y子も拝まないと災いが起きるぞ』と言っている。そのあと、自分の部屋に戻ったら御釈迦さんの焼き物が置いてあり、御釈迦さんは笑って『Y子も拝まないと災いが起きるぞ』と、祖父と同じことを言う。

さらに、「目が覚めてテレビをつけたら、夢の中の御釈迦様と同じものがいっぱい出てきた」とY子は不思議そうに語った。Y子一家が“地震対策”のテレビを見ているという夢が、SC

には、これからさらに“揺れ”ようとするY子一家を暗示しているように思えてならなかった。一方で、SCは、Y子が学校を休み始めた頃、祖父がY子を病院に連れて行ったという話を思い出し、母親でも父親でもなく祖父が付き添いをしたと聞いたときの違和感と、夢の中で手を合わせている祖父の姿がどこかで一致するように感じた。

最近も、叔母の家に居候するY子に、祖父から果物の差し入れが何度もあったとのこと。家族との関係が途絶えたまま叔母の家に暮らすY子が、祖父を通じて再び家庭に戻っていけるのではないかとSCは期待した。

#10：数週間、叔母宅で過ごすうち、Y子の気持は少しずつ安定し始めていた。その様子に気付いた養護教諭から担任に対して、Y子が保健室で取り組める課題のようなものを作成してほしいと要望を出し、それを受けて担任がY子の教科担当教師に課題の作成を依頼した。その甲斐もあり、Y子が保健室で課題に取り組む姿がみられるようになった。Y子への直接の関わりで自信を喪失しつつあった担任だが、このような形でY子に関わることで自己効力感を取り戻せたように思われた。

また、Y子が祖父に果物のお礼の手紙を書いたことから、祖父と祖母が叔母宅にいるY子を訪ねてきた。Y子は祖父母とこれまでの辛かった出来事を泣きながら話し合ったとのこと。祖父母の話では、Y子が出て行ってから、祖父母と父母の間にも溝が出来、これまで皆で食卓を囲んでいた家族が別々に食事を摂るようになったとのことだった。Y子は、祖父母と和解し、祖父とともに父母の居る家に帰ることになった。

#11：冬休み中、Y子はずっと自宅で過ごした。毎晩のように祖父の隣で寝、祖父と枕を並べながら、Y子の母親がY子くらいの年齢だったころの話などを聞いていたようである。

また、年明けから、Y子はB子に誘われてストリートダンスを始めた。しかし、Y子の母親は、Y子がダンスに出かけることに反対していた。Y子の住んでいる地域が田舎であるためか、ダンスには“遊び”や“非行”のイメージがあ

るようで、学校でもY子が教室にも行かずダンスをしていることを批判的に捉える教師も少なくなかった。SCは、ダンスに自分の存在の意味を見出すというY子の気持ちに支持的に関わった。

この週、O医師の希望で、O医師、担任、養護教諭、Y子の教科指導教師、SCが集まり、Y子の状態について理解を深め合うための勉強会をもった。この会でSCは、心理の専門家という立場で参加するだけでなく、Y子の症状や学校システムの認識に大きな差がある医師と教師をつなぐ役割を担うよう努めた。同時に、これまで「母親」としてY子を抱えていたSCが、今後は「父親」としてY子を学校に押し出す役目を担おうと考えていることを伝え、Y子の「居場所」を学校内に作ってもらえるよう訴えた。それを受けて、教師たちは、高校における別室登校制度や、補習・追試による単位履修制度の確立に向けて話し合いを行うことになった。また、SC抜きでも医師と学校がY子を支援していくための連携が取れる関係作りに努めた。

#12:「親と居ると自分という存在が有っても無くても良いような気がしてくる」と語った。Y子は自分が取り組んでいることを両親に理解し支えられたいのだろう。また、中学や高校のクラブ活動の中でそれが叶わなかったことが、Y子にとって自分の存在自体を揺るがす体験だったのではないかとSCは感じた。

また、Y子は20代の男性と付き合い始めた。「彼は湯たんぽのような人。彼の前でならば私は鎧を脱げる」と話す。その表現からは、以前の恋人との付き合いにあった“現実感の無さ”は感じられなかった。

#13: Y子の口から親の話聞くことが減った。親との口論より、ダンスとダンス仲間の人間関係のほうがY子の関心事のようであった。

#11の話し合いをきっかけに、担任とO医師が上手く連携を取っているようであった。また、それをきっかけに、担任から養護教諭やSCにY子のことが伝えられるような担任主導の流れができあがり、それと同時に担任がY子の問題を抱えていく意欲が高まっているようにみられ

た。しかし、この頃、Y子の進級に関する会議が始まり、前例のない処置を求める中で不安になった担任が、SCに依存的になる場面もあった。SCは担任の不安を受けとめながら、常に支持的な態度で関わった。

#14: Y子と彼の仲は急激に深まっているようであった。親は相変わらずY子を責めていたが、Y子はお構いなしといった感じであった。

#15: 母親が運転する車に乗っている時、Y子の不登校について母親が怒り、『一緒に死のう』と故意に危険な運転をする事件があった。Y子が自分から離れていくように感じた母親の行動化だったのかもしれない。

第三期:「父親」としての押し出し(#16~#20: X+1年3月~X+1年4月)

#16: 彼が暴力を振るうので別れたとのこと。数日後緑りを戻そうと彼から誘ってきたが断った。「まだ好きだけど付き合うのをやめる」と話す。そう話しながらも、恋人に対する未練も残っているように見えた。しかし、恋人との関係に潔い決断ができたことから、Y子の心的エネルギーがずいぶん溜まったと感じたSCは、暴力という問題の深刻さについて話し、今は辛くともその痛みに負けぬよう、Y子を強く導くような関わりを行った。

#17: 元気がない様子。恋人との別れも落ち込みの一因かもしれないが、SCは、Y子が進級会議の結果をととても気にしているように思えた。以前は自暴自棄になり、学校を辞めたいと言っていたY子であったが、進級を気にしている様子から、SCはY子が再び学校の中に「居場所」を見出し始めているのではないかと感じた。

#18: 担任の大きな働きによって、Y子は条件付きで進級できることに決まった。自分の進級のために、学年会議等で尽力する担任の姿を見ながら、Y子の中で担任への信頼と感謝の気持ちが芽生えたようである。「4月から教室に戻れるかどうか不安だ」と話す。表情からは、以前よりも気持ちが安定してきているようであった。〈不安だけどやってみようよ〉SCはもはや抱える「母親」としてではなく、押し出す「父親」としてY子にそう声をかけた。

#19: 新学期が始まり、Y子は新しいクラスに戻ることができた。「先日、O先生(O医師)のところへの通院も終わった。少し寂しいな」と言って笑った。「お母さんが『あんたは寝顔が可愛いのに、起きてたら憎らしいことを言うね』と言うんだ」とうれしそうに言った。最近、あんなに争っていた母親とDVDを借りに行くこともあるようだ。SCの「母親」あるいは「父親」としての役割もそろそろ終わりだと感じた。

#20: 最近、母親と専門学校の見学に出かけたりしている。前年度は欠課が多かったため、たくさんの補習や追試があるが頑張っているようである。クラブ活動にも参加し、コンクールの準備に急がしそだった。この日の朝、携帯電話で撮ったペットの写真を、保健室で友達に見せているY子の明るい横顔を見ながら、Y子とのカウンセリングもそろそろ終わりだなとSCは思った。そのことをY子に伝えると、Y子も納得したため、Y子とのカウンセリングは終結とした。

IV 考察

1. 「母親」としての抱えと「父親」としての押し出し

不登校の青年を抱える家族システムには、母子サブシステムが他に対して厚い境界を形成しており、父親がその母子サブシステムに対して疎遠な関係になっていることが多いと言われていた(中村, 1997)。さらに中村は、機能的な家族システムでは、両親サブシステムの情緒関係は良好で、子どもに対して境界(世代間境界)を保っていると述べている。

しかしながら、本報告における不登校高校生の事例では、#3で担任が家庭に電話を入れることをY子が非常に嫌がったり、#4で医師の診断をSCから母親に伝えてほしいと依頼したことなどからも分かるように、父子サブシステムだけではなく母子サブシステムの結びつきも非常に弱いと考えられた。また、P#2で、Y子の家出を心配した母親が、父親ではなく、面識の少ないSCにその連絡先を調べて相談してくるなど、夫婦サブシステムの結びつきも脆弱

であることが伺えた。

また、本事例は、母方祖父母の元で、娘である母親と婿養子の父親、それからY子と兄という三世代が暮らすY子の家庭であり、母親は「母親」としてではなくむしろ祖母の「娘」としてこの家に存在していた。Y子の服装が派手であれば祖母が娘である母親を叱るというように、母は常に祖母の目を意識してY子を育てている、心理的には「母親」不在の家庭であった。さらに、婿養子であり、母方祖父母の下で家業を手伝う父親は、「娘」である母親の夫としてこの家に存在しているものの、いわゆる大黒柱の役割は実質的には祖父が担っていると思われた。#9でY子が見た夢で祖父が一家の息災を願っていることや、#10では祖父がY子を家出先の親戚宅から連れ帰ったことなどからも、Y子一家における祖父の存在感は大きかったが、その一方で、父親を#8で「お母さんの言いなり」と表現するなど、父親は家庭の問題に対して常に消極的な態度であり、父親は「父親」としての心理的役割を担えてはいなかったと思われる。

菅(2005)は、思春期の子どもとのことで来談する親の中に、“自分の親と子どもとしての自分”という課題が整理されるまで、親として子どもの問題に関われない親が増えていると述べている。#P3で、Y子の不登校が受け入れられず、机を叩いて泣き続けたY子の母親も、“自分の親と子どもとしての自分”という課題を抱えた「娘」なのかもしれないと思われた。

母親が子どもを抱える力が弱く、子どもを社会に押し出していく父親の力もうまく機能しない家庭で、Y子は不安定な思春期を乗り切っていく、安全な「足場」を持てなくなっていたのではないだろうか。しかし、スクールカウンセラーはY子の家族に働きかけることで、家族構造の中に「父親」および「母親」を取り戻すような関わりを試みたものの、両親のカウンセリングへの来談意欲は低く、家族療法的な取り組みを行っていくことは期待できなかった。

中村(1997)は、システム理論の観点から、「個人」である青年が「社会」へ出て行くとき、

家族を「踏み台」にしたり、社会で挫折したときの「癒し場」にすると述べ、不登校の青年がいる家族には、家族が社会との「橋渡し」として機能しない「橋渡し機能不全家族」が多いと述べている。Y子は中学時代、クラブ活動の上下関係が原因で胃潰瘍になり、クラブを辞めて母親にひどく叱られた経験がある。クラブという学校社会での失敗体験を母親に受け止められず、「癒し場」を持てない経験を抱えたまま、今回も、クラブ活動で挫折感に苛まれたときに父親に怒鳴られた経験が重なった。Y子にとって、社会で挫折したときの「癒し場」として家庭が機能しておらず、そのことから学校社会に出て行く自信をもてなくなったものと思われた。Y子にとって、ダンスグループへの参加は、二度にわたって挫折したクラブ活動への追体験だったと思われた。そのため、スクールカウンセラーは「母親」としての抱えの中で、Y子がダンス活動に没頭することに支持的に関わり、二度にわたる過去の挫折を成功体験に変えるよう試みた。

これまで両親が自分の理想とする受け止め方をしないことに対し怒りをあらわにしてきたY子であったが、#13以降は両親に対してそのような怒りを向けなくなっていく。#11で報告されたように、Y子は祖父と枕を並べ、母親の若かった頃の話の聞いたりしながら、母親が絶対的な存在ではなく、「一個の人間であることを受け入れ自立」(河合, 1980)し始めたのかもしれない。

2. 「居場所」作りとつなぐ役割

スクールカウンセラーによる「母親」としての抱えの中で、Y子のダンス活動に対して支持的に関わった事で、Y子はダンスを通して自己の存在を確かめ、自信を取り戻すことができた。ダンス活動における成功体験を通して、心的エネルギーが溜まり、日増しに生き生きとした表情を取り戻しつつあるY子を見て、これまで「母親」としてY子を抱えてきたスクールカウンセラーが、「父親」としてY子を学校に押し出す時期が近づいていると思われた。しかし、学校では、Y子がもともと反抗的で教師の不登

校生徒イメージと異なっていたことに加え、教室に入れないにもかかわらずストリートダンスを始めたことから、周囲の理解およびサポートがさらに得難くなっていた。音楽クラブの部長として部員を統率できない自分や、家族の中で父親としてイニシアチブを取れない父親とイメージが重なる、おとなしい担任教師をY子は信頼できないようであった、また、その担任やそれ以外の教師もY子をサポートするための準備は出来ていないと思われた。Y子が、ダンスの練習には生き生きとした表情で行くのにに対し、教室には依然入ろうとしないことから、学校にはY子の「居場所」がないことが伺えた。スクールカウンセラー自身が、「父親」としてY子を母子一体感から外へ押し出す際、押し出し先である学校に「居場所」を作っておくことが非常に重要であると思われることから、その準備段階として、教師と連携を取り、「居場所」作りを促す必要があった。

「居場所」作りは、担任や養護教諭、クラブ顧問や教科担当教師、管理職などと連携を取り、まずは、学校にY子が怠学ではなく不登校であることを理解してもらうことから始めた。Y子の状況に関して、教師だけでなく、スクールカウンセラーやY子の主治医がそれぞれの立場から見解を述べ、認識を深めるような話し合いが、教師や主治医の希望で開かれた。スクールカウンセラーは、その会において、自らの専門性からの意見を述べるだけでなく、教育と医療をつなぐ役割を担い、担任と主治医との架け橋になるよう努めた。それ以後、担任が中心となって、主治医やスクールカウンセラーのコンサルテーションを求め、それを他の教師に伝えながら、教師の間で、別室登校を出席と認める制度や、補習・追試によって単位を認める制度などに関する会議も開かれるようになった。Y子の状況や辛さに関する理解が、Y子に関わる教師たちの間で深まるにつれ、保健室にいるY子に声をかける教師も現れ始めた。何より、これまで積極的な動きをしなかった担任が中心になり、Y子の学校復帰のためのさまざまな制度を学校が構築したということが、Y子が担任をはじめ学

校に対する信頼感を取り戻すことに繋がり、学校を再び「居場所」として取り戻せた一因になったと思われる。

しかし、教師たちのY子への関わりが深くなるにつれ、彼らがT子の話に巻き込まれるような形で憤慨したり不安になることが次第に多くなった。教師たちがY子に共感するあまり過度に家族を批判したり、Y子の態度や行動に一喜一憂しすぎるなど、バランスを崩しそうになったときには、スクールカウンセラーは、学校という集団のグループダイナミクスに巻き込まれないよう中立の視点を保ちながら、「居場所」作りを行う集団への援助を行った。田中（2003）は、面接に軸足をおく取り組みに徹することで学校のグループダイナミクスにとらわれない取り組みが可能になることを示している。#7、#8、#15などの学校システムが動揺をきたす場面で、スクールカウンセラーはY子との面接に軸足をおくことで、周囲に振り回されないようバランスをとってきた。スクールカウンセリングにおいては、クライアント本人だけでなく、常に家庭や学校全体をクライアントとしてみる視点が必要であり、それぞれの立場をつなぐ役割を担ったり、集団のグループダイナミクスに振り回されないことは大切であると思われた。

V おわりに

スクールカウンセリングは、通常のカウンセリングセンター等で行う面接とは異なり、クライアントや学校自体にかなり積極的に関わっていく事が求められる。中川（2005）も、スクールカウンセラーの在り方を、「積極的な連携」と「待ちの姿勢」とに二分した上で、「学校という多くの人が空間と時間を共有する場で行うスクールカウンセリングの場合、前者（積極的な連携）が中心になることが多い」と述べている。しかし、本事例では、#6の病院への付き添いや、P#2でスクールカウンセラーが感じた「SC抜きではY子を支えるシステムとして機能しない」状況等、スクールカウンセラーの「抱え」過ぎがあったかもしれない。スクールカウンセラーが「母親」として抱えようとする

場合、スクールカウンセラーとして、どこまで本来の治療構造としての枠を守り、どこまで積極的に関わっていけばよいのかという点は非常に難しい課題である。

また、学校現場におけるカウンセリングでは、比較的早期の問題解決が期待される傾向にあり、また、スクールカウンセラーの任期が1年と限られている点からも、治療のペースが論点となってくる。さらに、高校では不登校による単位の未修が、留年や場合によっては退学といった事態を招くため、早期に授業に出席させることが重要である場合も多い。本事例は、7ヶ月におよぶ保健室登校と、その間に行った全20回の面接を経て、翌年4月より教室に戻った。補習などを無事終えれば留年もなく進級できることとなり、一定の問題解決を得たが、筆者には、何年もかければ実際の両親との間で、母子一体感や父親によってそれを断ち切る経験をさせることができたのではないだろうかという思いが残った。今後は、スクールカウンセリングでの問題解決に掛け得る時間の問題や、家族の協力が得られ難い事例の中でいかにして家族の問題を解決するかということを模索したい。また、家族システムだけではなく、学校システムへの支援を踏まえたスクールカウンセリングの在り方についても検討していきたい。

文 献

- 河合隼雄（1980）：家族関係を考える。講談社現代新書。
- 中川美保子（2005）：スクールカウンセリングについての一考察。心理臨床学研究，22（6），605-615。
- 中村伸一（1997）：家族療法の視点。金剛出版。
- 西尾和美（1999）：機能不全家族「親」になりきれない親たち。講談社。
- 佐藤修策（2005）：不登校（登校拒否）の教育・心理的理解と支援。北大路書房。
- 菅佐和子（2005）：思春期心理臨床のチェックポイントーカウンセラーの「対話」を通して。創元社。
- 菅佐和子（2006）：思春期の子どもにかかわる教師と親へ。児童心理No.846, 2-11。
- 田嶋誠一（2001）：相談意欲のない不登校・ひきこもりとの「つきあい方」。臨床心理学第一巻第三号，333-344。

田中慶江 (2003)：心因性頻尿から不登校に陥った
中学生のスクールカウンセリング。心理臨床
学研究, 21(4), 329-339.

Abstract

An Approach to the Non-attendant in the School Counseling
—The trial of filling the “Father” and the “Mother” roles by the school counselor—

SAKATA, Maho

Dept. of Education, Wakayama Univ.

HIROI, Ryoichi

Dept. of Human development and education, Kyoto women's Univ.

Key Words: Non-attendant, “Father”, “Mother”, “place”, Liaison

This study is to discuss the merits and the concerns of the “Father” and the “Mother” supports by the school counselor. It is examined through the case of the high school female student who refused the attendance by the failure in the club activity. We gathered it was effective for adolescences that the counselor took the “Father” and the “Mother” roles upon herself, in the case that the clients groping for the good family relationship couldn't receive the enough support by his/her parents. However, when the counselor takes the “Father” role to push out the non-attendant students to the community, preparing the “place” to call his/her own is very important. Therefore, the school counselor and the community members, such as the teachers, have to have the good cooperation. The school counselor has to assume the liaison among the students and the teachers, the family, and the community medicine. Also, the school counselor is expected to support them without being deluded with the group dynamics.